

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2023年11月22日 (Vol.180)

『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』月暦図と俳句ーその4、1月・2月・3月

『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』月暦図と俳句 ーその4、1月・2月・3月



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les_Tr%C3%AAs_Riches_Heures_du_duc_de_Berry_mars.jpg

3月『春になり農作業をはじめる農夫たちと塔の上の竜』

『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』とはフランス王の弟で、中世を代表する芸術パトロン、ビブリアオフィル（書籍愛好家）として知られたベリー公ジャン1世（1340-1416）がフランドル（現在のベルギー、フランス北部にまたがる地域）出身の画家ランブール兄弟（ポール、エルマン、ヨハン）に発注した世界で最も美しいとされる彩飾写本です。

1416年に奇（く）しくも、発注者と制作者3兄弟がともに死亡し、15世紀末に別の画家が完成させました。

1ページのサイズが29×21cmで、206葉の最高級の羊皮紙（ようひし）と呼ばれる紙で構成され、見開きの左ページが「月暦図」で、右ページが暦です。

600年前の12か月を月ごとの風景と人々の暮らしの様子が色鮮やかに描かれています。

今回は4回目で、1月「新年の祝宴につくベリー公」、2月「冬が過ぎるのを待つ農村の風景」、3月「春になり農作業をはじめる農夫たちと塔の上の竜」の「月暦図」と俳句です。

お楽しみください。

※時祷書とは基督教の裕福な貴族や市民が日々の宗教的なおつとめをこなすための祈りのハンドブックのようなもの。

1. 1月「新年の祝宴につくベリー公」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les_Tr%C3%A8s_Riches_Heures_du_duc_de_Berry_Janvier.jpg

1月「新年の祝宴につくベリー公」

宮殿での新年の祝宴が描かれています。
この祝宴の主人公は画面右奥、豪華な衣装をまとったでっぷりとした男性で、この時祷書を注文したベリー公です。
この日のメインゲストであるフランス中部の都市シャルトルの司教と推定される坊さんと言葉を交しています。

食卓脇でナイフを手にしている二人に注目ください。
凝った織文様で色彩も美しい衣装を身にまとい、左の一人は食卓で肉を切り、もう一人もナイフを手にこれから野鳥のローストラしき料理をさばこうとしています。
彼らは召使い？
とんでもない。最も信頼のおけるベリー公の親族や家臣の中から選ばれたエリートたちです。
それが証拠に右の男の足元を見ると、その踵（かかと）から飛び出ているものは何かと言えば、乗馬に必要な拍車です。
拍車は騎士身分の象徴です。
ではなぜ、そのような高い身分にある者が食卓のサーブなどという「召使いの仕事」をしているのでしょうか？
大きな理由は毒殺対策です。
「権力者に毒を盛って暗殺する」中世以来ルネサンス期のイタリアを筆頭に、欧州各地の宮廷で毒殺の陰謀が跡を断たなかったことは歴史が示しています。

さて、食卓に視線を移すとその右端に、船の形をした大きな容器が目立ちます。
これはベリー公の財産目録にある「金の塩入れ」ではないかとの推定がなされています。
こうした船形の器（金は極めて異例）は、フランスで「ネフ」と呼ばれ、もともと諸侯クラスが食卓で使うナイフやスプーン等の食器や調味料、スパイス類を入れたもので、地位と権力の象徴でした。
後世このネフが塩入れの代名詞となっていき、食卓で最も重要な器の一つとして広く欧州の宮廷で用いられるようになります。

現在では減塩することが健康・長寿の秘訣とされ、減塩レシピがもてはやされています。
しかし、塩は人間にとって重要な存在で、これなしでは一日たりとも生きることはできません。
味をつけるためだけでなく、殺菌作用、防腐作用もあり、神聖な物として扱われていました。

日本でも同じように「清めの塩」があります。
また、給料のことをサラリーといますが、塩（salt）が語源と言われています。

ここでは、初春の季語「梅」と晩秋の季語「秋刀魚」＋「塩」で詠まれた句をとりあげました。

勇氣こそ地の塩なれや梅真白

中村草田男

※地の塩 新約聖書の教えの一つで、塩は食物が腐るのを防ぐことから、道徳や行いの優れた社会の規範となるべき人びと。

また少数派であっても批判的精神を持って生きる人をたとえています。



左：歌川広重『名所江戸百景』「亀戸梅屋舗」1857年

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige_Pruneraie_%C3%A0_Kameido.jpg

右：フィンセント・ファン・ゴッホ『ジャポネズリー：梅の開花（広重を模して）』1887年

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Vincent_van_Gogh_-_Bloeiende_pruimenboomgaard-_naar_Hiroshige_-_Google_Art_Project

アンデスの塩ふつて焼く秋刀魚（さんま）かな

小豆澤裕子



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Salar_uyuni_200701.jpg

南アメリカ中央部ボリビアのアンデス山脈の一部にあるウユニ塩原が冠水し、天空の鏡となっている。

2. 2月「冬が過ぎるのを待つ農村の風景」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les_Tr%C3%A8s_Riches_Heures_du_duc_de_Berry_f%C3%A9vrier.jpg

2月「冬が過ぎるのを待つ農村の風景」

1月の宮殿での祝宴の絵から一転、遠くに宮殿の屋根と塔が見える雪景色の農村が描かれています。家の中では女性たちが暖炉の前に集まり、スカートをたくし上げ、脚全体が温かくなるように暖をとっています。

羊小屋では羊たちがおしくらまんじゅうをするように身を寄せ合って寒さに耐え、その横ではこれくらいの寒さはなれっことばかりに鳥たちが餌をついばんでいます。画面後方では、男性がまるでゴルフのスイングの練習をしているような体勢で薪割りをし、ロバをつれた男性は薪を運んでいます。

一面の雪景色で寒いはずですが、フランスの田舎町のどこかほっこりとした感じが伝わってきます。戦争やペストの流行で命を落とす恐怖が身近にあった中世の人々にとって、理想の世界を描くことによって「現実の生活もこのようでありますように」という祈りの形を絵で表現しているのかも知れません。

ここでは絵の一面の雪から、晩冬の季語である雪を詠んだ句をとりあげてみます。

川端康成はノーベル賞受賞講演の冒頭に道元禅師の「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷(すず)しかりけり」の歌を引用しました。

古来、日本文化の中心であった大和(やまと)や京都では、舞い降りるさまや白く積もっては消えるはかなさから雪を風雅なるものと捉え、春の花(桜)、秋の月と並んで日本の冬の美としてきました。しかし、降雪の少ない地域とは異なり、「雪国」では雪は生活を制限するやっかいなものでもあります。



<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:%E8%B6%8A%E5%BE%8C%E4%B8%AD%E9%87%8C%E9%A7%85%E5%90%8D%E6%A8%99.jpg>

雪に埋もれた JR 越後中里駅名標

是(これ)がまあ終(つひ)の栖(すみか)か雪五尺

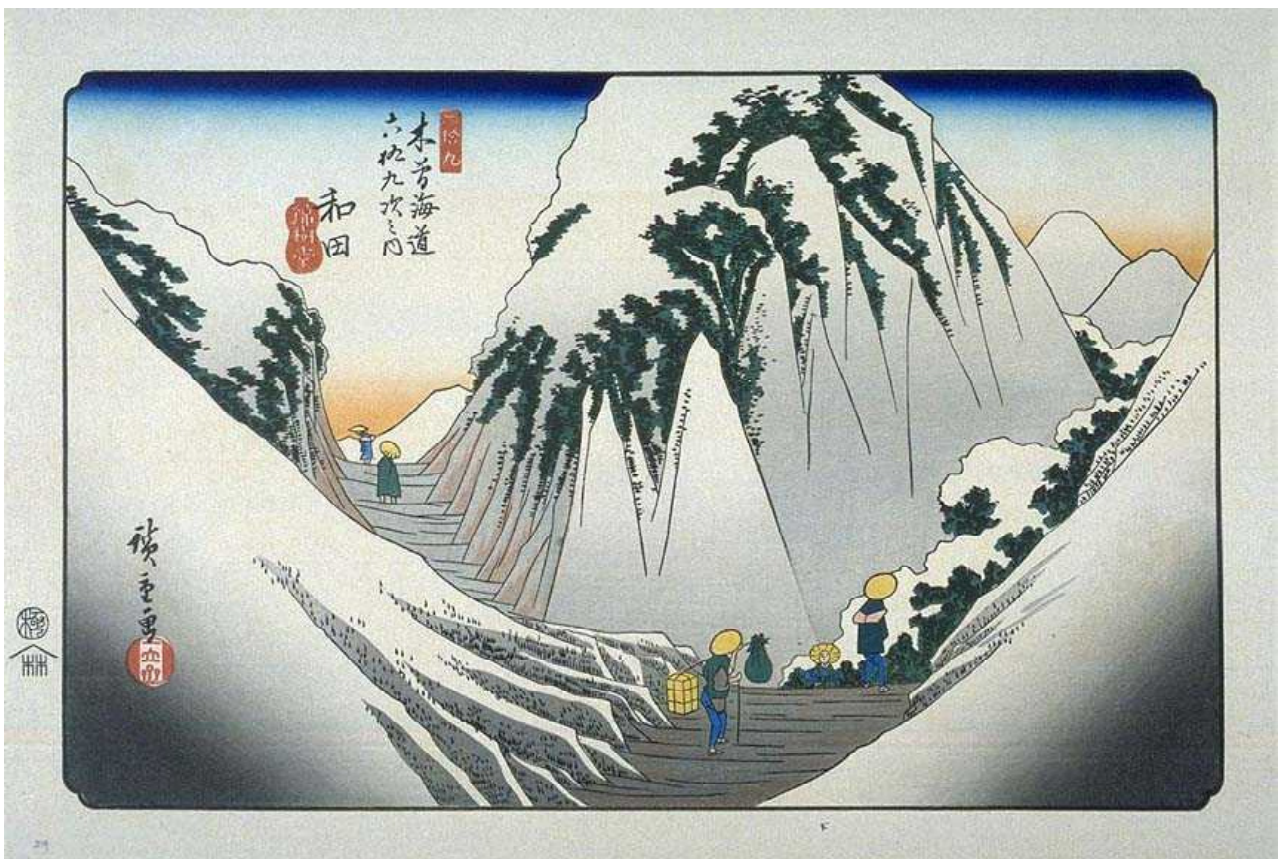
終の栖＝死ぬまで住むことになる最期の家

小林一茶

当時も現在も、名句を多く詠んでいて俳人として有名な一茶ですが、三十五年におよぶ江戸を中心とした俳句での生計は想像以上に不安定なもので、そのような生活に終止符を打ち、故郷の信濃の柏原に帰った時の句です。

この辺から新潟県上越市の高田あたりにかけては、世界一と言っても過言ではない豪雪地帯です。天和元年（1681年）の記録的な豪雪の年には、「この下に高田あり」という札を立てられた話が伝わっています。

安定を求め戻った故郷の家は深い雪に埋もれていました。そんな中詠まれたこの句は、先の見えない現実を嘆いているのか、はたまた一茶の持ち味で明るく揶揄（やゆ）しているようにも感じられます。



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kisokaido28_Wada.jpg

『木曾街道六十九次 和田』歌川広重（1797-1858）

一茶とほぼ同じ時代を生きた広重の絵

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規

結核を病み、喀血（かっけつ）した自身を、鳴いて血を吐くといわれるホトトギスになぞらえて、子規と号したことに象徴されるように、子規の文筆活動はその病と切っても切り離せないものでした。

1888年（明治21年）最初に喀血し、1896年（明治29年）結核菌が脊椎（せきつい）を冒し、当時の医学では不治の病であった脊椎カリエスを発症していると診断されます。

以後床に伏す日が多くなり、数度の手術も受けましたが空しく、やがて歩行不能になります。1899年（明治32年）夏頃以降は座ることさえ困難になりました。

この頃から子規は約3年間ほぼ寝たきりで、寝返りも打てないほどの苦痛を麻痺剤で和らげながら、俳句・短歌・随筆を書き（一部は口述）続けます。掲句は東京に住んでいたことから、雪がたくさん積ることが珍しく、雪がどれくらい積もったのか、何度も家族に尋ねている状況を詠んだものです。

病んでいても好奇心あふれる性格であった子規がいただいた歩いて見に行けない悲しさ、もどかしさとともに、どのような状況になろうが表現しようとする意欲も伝わってきます。



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_099.jpg

『名所江戸百景 浅草金龍山』歌川広重（1797-1858）



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kawase_Z%C3%B4j%C3%B4ji.jpg

『東京二十景』より「芝増上寺」川瀬巴水（1883-1957）

3. 3月 「春になり農作業をはじめる農夫たちと 塔の上の竜」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Les_Tr%C3%AAs_Riches_Heures_du_duc_de_Berry_mars.jpg

3月「春になり農作業をはじめる農夫たちと塔の上の竜」

雪が積もっていた間は農作業ができなかった農夫たちが3月になり寒さがゆるんできて、田畑で働きはじめました。

絵の中央手前では牛に鋤（すき）を引かせて土起こしをし、その右上では種蒔（ま）きの準備をしています。

土を深く掘り起こすことで空気をよく含んだ肥えた土壌が作物の生育に良い影響を与えます。

その左上では葡萄の木のまわりの土の入れ替えと枝の剪定が、更にはその上では羊の世話をする牧夫が描かれていて、すべて、豊かな実りをもたらしてくれるための3月の大事な農作業です。

また、城の左上空には雲行きが怪しい空が見え、3月は天候が変わりやすく、間もなく雨が土を潤すことを意味しています。

フランスの早春が描かれていて、のどかな雰囲気のある絵です。

しかしこの絵にはいくつか疑問点もあります。

まず、農作業するには農民たちの服装がお洒落すぎです。

これは、絵の依頼主であるベリー公が思い描く、ある意味「理想的な」農民の姿を描くことで、平和な理想郷を演出しているようです。

描かれているのはリュジニャン城という城で、1375年、ベリー公はこの城を占拠していたイングランドに大金を払って獲得し、城の改築をはじめます。

特にこだわったのが美しい屋根と大きな塔です。

城郭の向かって右の塔のオレンジ色のとんがり帽子の屋根の上には黄金の竜の姿があります。

この黄金の竜はメリュジーヌという名の妃が竜にその姿を変えて城を守るという伝説にもとづいています。



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Village_of_Lusignan.JPG

リュジニャン村

その伝説はリュジニャン地方の貧しい若者は森で美しい娘と出会い、娘から授けられた知恵で広大な領地と美しい城を手に入れました。

若者は娘とむすばれて、かわいい子供がつぎつぎに生まれ幸福な時を過ごしました。

しかし、娘には一つの秘密があり、それは、毎週土曜日に水浴する時、その姿をけっして見ないように夫に頼みました。

ところがある日、夫はその姿を見てしまいます。

水浴中の妻の下半身は竜だったのです。

妻はそれを恥じて城を去りますが、城が危機にさらされるとあらわれて城を救ったと伝えられています。

そのことからベリー公は黄金の竜を描かせたといわれます。



<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Melusinediscovered.jpg>

書籍商クードレット（生没年不詳）による『メリュジーヌ物語』で描かれた、
入浴中のメリュジーヌと覗き見るレイモン（夫）（レモンダン）

メリュジーヌは上半身は中世の衣装をまとった美女で、下半身は蛇、背中には竜の翼が付いていたと伝えられ、水の精霊とされます。

その原型はヴァイヴルやセイレーンといった怪物であろうと考えられ、ヴァイヴルは、蝙蝠（こうもり）の翼を持ち、上半身は女性、下半身は蛇の姿で、宝石の瞳を持つとされます。

セイレーンはギリシャ神話に登場する海の怪物で、上半身は女性、下半身は鳥の姿とされますが、後には魚の姿をしているとされます。



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Melusine_\(Bayard\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Melusine_(Bayard).jpg)

竜の翼を備えた姿で描かれたメリュジーヌ。

エミール・ベヤード（生没年不詳）著『魔法の歴史』のイラスト



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Wyvern_Liber_Floridus.jpg

ヴイーヴル (1448年画) (作者不詳)



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:WATERHOUSE_-_Ulyses_y_las_Sirenas_\(National_Gallery_of_Victoria,_Melbourne,_1891._%C3%93leo_sobre_lienzo,_100.6_x_202_cm\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:WATERHOUSE_-_Ulyses_y_las_Sirenas_(National_Gallery_of_Victoria,_Melbourne,_1891._%C3%93leo_sobre_lienzo,_100.6_x_202_cm).jpg)

『ユリシーズとセイレーン』ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス (1849-1917)

ここでは「竜」に関する季語をとりあげます。

竜はもちろん想像上の動物ですが、東洋でも神聖かつめでたい物、また雨と日照りなど水をつかさどる神獣として、古来より民衆にあげられてきました。

中国後漢時代の字典『説文解字（せつもんかいじ）』に「竜は春分にして天に昇り、秋分にして淵に潜（ひそ）む」とあり、ここから「竜天に登る」が仲春の、「竜淵に潜む」が仲秋の想像上の季語となったものと思われます。

春分の頃から秋分の頃まで出現し、雨と日照りをつかさどる神の意味を考えるとそこには農作物と雨の関係が連想されます。

春分の頃、水分の少ない田畑に潤いを与え、農作物を育て、十分に育って実の収穫が終わればまた、乾燥した田畑に戻ります。

まるで竜は作物を育てるために春分の頃に目覚めて雨を降らせ、田畑を潤し、収穫が終わる秋分の頃、一年の仕事を終えて竜は淵に潜んで次の春を待つのでしょうか。

そんな「竜」を詠んだ句をどうぞ。

竜天に黄帝(こうてい)の御衣(ぎょい)翻(ひるが)へる 石井露月 (いしいろげつ)

七十二候でもこの時季は「雷乃(かみなりすなわ)ち声を発す」「始めて電(いなびかり)す」など、竜と縁の深い雷・電の気象が活発に起こるとされています。



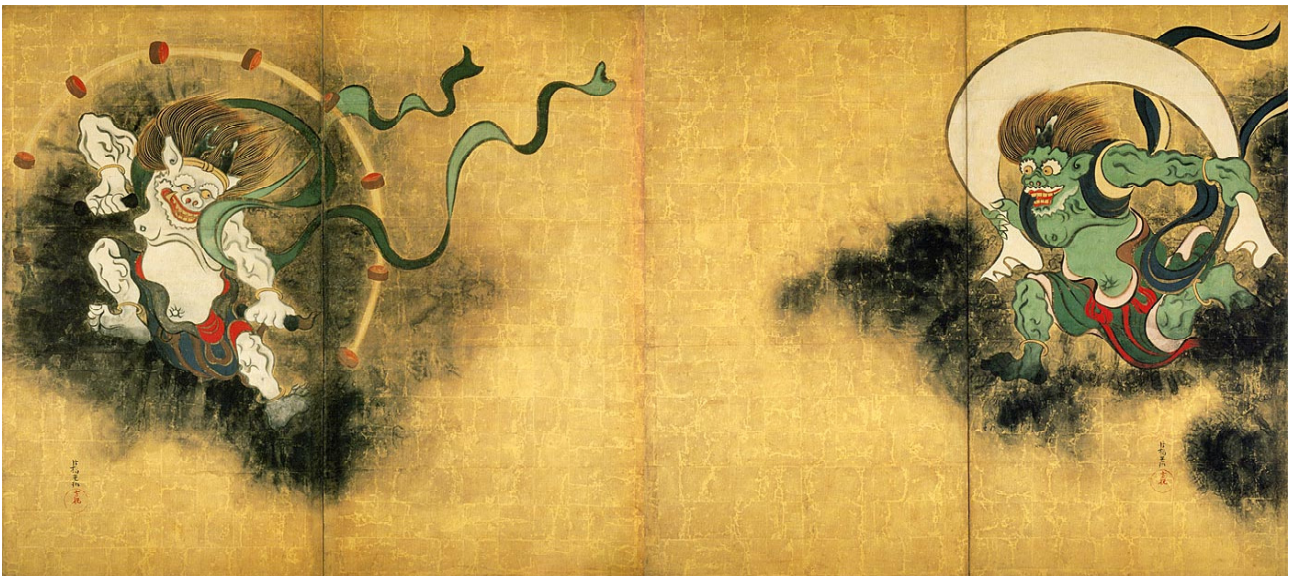
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kannon_Riding_a_Dragon_by_Harada_Naojiro_\(National_Museum_of_Modern_Art,_Tokyo\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kannon_Riding_a_Dragon_by_Harada_Naojiro_(National_Museum_of_Modern_Art,_Tokyo).jpg)

『騎竜観音』原田直次郎（1863-1899）

竜淵に潜みて山湖鏡なす

間宮あや

七十二候でこの時季は「雷乃ち声を収む」があり、夏には盛んに鳴っていた雷がこの頃になると声を収めて鳴らなくなるといいます。



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Korin_Fujin_Raijin.jpg

『風神雷神図』尾形光琳（1658-1716）

三春の季語に「耕（たがやし）」があります。
3月の絵の土起こしの部分に着目し私も詠んでみました。

耕すや芋田豆田にたてよこに

白井芳雄

「耕」は作物・野菜の種を蒔（ま）く前や苗を植えつける前に、雪や霜で固くなった田畑の土を鋤（す）き返し、柔らかくほぐす作業をいいます。
もともとは「田返（たがえ）し」の意味ですが、現在は「たがやし」とよばれます。
耕耘機（こううんき）やトラクターが導入されるまでは、四季のある春の農村なら洋の東西を問わずどこでも見られた光景です。

ゴッホは油絵具のこってりとした濃厚な質感を生かして、掘り返された土の重みと荒れ模様の空を表現しています。



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Vincent_van_Gogh_-_Geploegde_akkers_\(%27De_voren%27\)-_Google_Art_Project.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Vincent_van_Gogh_-_Geploegde_akkers_(%27De_voren%27)-_Google_Art_Project.jpg)

『耕された畑（畝）』 ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ（1853-1890）

全体を通じての参考文献、出典：エルンスト・Hゴンブリッチ著
(翻訳 天野衛、大西広、奥野阜、桐山宣雄、長谷川摂子、
長谷川宏、林道郎、宮腰直人)
『美術の物語』(河出書房新社)(2022年)
ISBN978-4-309-25628-3

高橋明也責任編集
『ART GALLERY テーマで見る世界の名画
7 風俗画 日常へのまなざし』(集英社)(2018年)
ISBN978-4-08-157077-5 C0371

宮下志朗著
『カラー版 書物史への扉』(岩波書店)(2016年)
ISBN978-4-00-061134-3

千足伸行著
『隠れ名画の散歩道』(論創社)(2013年)
ISBN978-4-8460-1239-7

舟田詠子著
『パンの文化史』(講談社)(2022年)
ISBN978-4-06-292211-1 C0139

大原千晴著
『名画の食卓を読み解く』(大修館書店)(2012年)
ISBN978-4-469-25082-4

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』(講談社)(2008年)
ISBN978-4-06-128972-7

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員
『新版 角川俳句大歳時記 春』(KADOKAWA)(2022年)
ISBN978-4-04-400504-7 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員
『新版 角川俳句大歳時記 夏』(KADOKAWA)(2022年)
ISBN978-4-04-400499-6 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員
『新版 角川俳句大歳時記 秋』(KADOKAWA)(2022年)
ISBN978-4-04-400500-9 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員
『新版 角川俳句大歳時記 冬』(KADOKAWA)(2022年)
ISBN978-4-04-400502-3 C0392

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア(Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3F
TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com